

5年前、小学校のPTA役員として初めてコミュニティ・スクールの会議に参加していたわたしは、教室や廊下にひっそりと並ぶ学級文庫が気になって仕方がなかった。懐かしき30年前の我が愛読書「いたずらまじょ子シリーズ」をはじめとするこのラインナップは、いつから、誰が、どのように管理しているのだろう……と。

翌年、わたしは学級文庫の充実のために走り出した。小学校の保護者から絵本の寄贈を募ろう。でも、それだけでは低学年向けの本しか集まらないかもしれない。では、中学校にも協力を仰ごう。いや、それなら中学校区でうちだけが取り組むのもよくない。それなら、中学校区の4校みんなで作る必要があるのではないか。「これは思った以上に大変なプロジェクトになりそうだ」と、だんだん震えてきたが、当時の管理職は「やりたいようにやれ」と背中を押してくれた。

あの手この手でPTA会長たちを捕まえ、チームを組んだ。各校の先生方にも説明に回り、チラシを配った。こうして「つながる絵本プロジェクト」は始まり、半年間で1,500冊近い本が集まった。新品同様の図鑑から、超大作の歴史本、手入れが必要な名作絵本まで。「子どもたちのために」と、たくさんの方が協力してくれたことが、涙が出るほど嬉しかった。反面、仕分けや修繕は地獄の作業だった。PTAだけでなく、各校の図書ボランティアさんも見かねて助けてくれた。神様に見えた。この国には八百万の神がいるというのが、図書ボラもまた、神である。

それから3年後、「またやらないか」と声をかけてくれる人がいた。頻繁にやってもあまり冊数は集まらないだろう。3年も経てば、また一からのスタートになる。正直、もうやらないつもりでいた。それでも、声をかけてみると、各校の図書ボランティアさんやPTAのつながりが、息を吹き返したように感じた。

子どもたちのために、という想いが人をつなぐ。

2度目のプロジェクトでも、800冊を超える本が集まった。わたしは、冊数以上に、この取組に賛同してくれる人の輪が広がっていることが嬉しくて仕方がない。「3年おきでもやると分かっているれば、本を手放さずにとっておくよ」と声をかけてくれる人もいる。市内の別の学校でも、「つながる絵本プロジェクト」を参考に、同じような取組を始めてくれたところがあった。

本の寄贈に限らず、こうやって人がつながっていく仕掛けを、わたしは学校や地域でこれからもつくっていきたい。一人の「やってみたい」を、誰かが応援してくれる。その想いがまた別の誰かへ渡っていき、気づけば大きな輪になっている。

そんな人のつながりの中に、自分もいる。
わたしのしあわせは、ここにあるのだと実感している。

四日市市立南中学校/泊山小学校 CS コーディネーター
堀 加奈